

## 【A年】待降節第3主日(2024年12月15日)

## 【旧約聖書日課】士師記 13章2~14節

2その名をマノアという一人の男がいた。彼はダンの氏族に属し、ツォルアの出身であった。彼の妻は不妊の女で、子を産んだことがなかった。3主の御使いが彼女に現れて言った。「あなたは不妊の女で、子を産んだことがない。だが、身ごもって男の子を産むであろう。4今後、ぶどう酒や強い飲み物を飲まず、汚れた物も一切食べないように気をつけよ。5あなたは身ごもって男の子を産む。その子は胎内にいるときから、ナジル人として神にささげられているので、その子の頭にかみそりを当ててはならない。彼は、ペリシテ人の手からイスラエルを解き放つ救いの先駆者となる。」6女は夫のもとに来て言った。「神の人がわたしのところにおいでになりました。姿は神の御使いのようで、非常に恐ろしく、どこからおいでになったのかと尋ねることもできず、その方も名前を明かさませんでした。7ただその方は、わたしが身ごもって男の子を産むことになっており、その子は胎内にいるときから死ぬ日までナジル人として神にささげられているので、わたしにぶどう酒や強い飲み物を飲まず、汚れた物も一切食べないようにとおっしゃいました。」8そこでマノアは、主に向かってこう祈った。「わたしの主よ。お願いいたします。お遣わしになった神の人をもう一度わたしたちのところに来させ、生まれて来る子をどうすればよいのか教えてください。」9神はマノアの声をお聞き入れになり、神の御使いが、再びその妻のところにも現れた。彼女は畑に座っていて、夫マノアは一緒にいなかった。10妻は急いで夫に知らせようとして走り、「この間わたしのところにおいでになった方が、またお見えになっています」と言った。11マノアは立ち上がって妻について行き、その人のところに来て言った。「この女に話しかけたのはあなたですか。」その人は、「そうです」と答えた。12マノアが、「あなたのお言葉のとおりになるのであれば、その子のためになすべき決まりとは何でしょうか」と尋ねると、13主の御使いはマノアに答えた。「わたしがこの女に言ったことをすべて守りなさい。14彼女はぶどう酒を作るぶどうの木からできるものは一切食べてはならず、ぶどう酒や強い飲み物も飲んではいけません。また汚れた物を一切食べてはなりません。わたしが彼女に戒めたことは、すべて守らなければならない。」

## 【使徒書日課】フィリピの信徒への手紙 4章4~9節

4主にあって常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。5あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになるにさい。主はすぐ近くにおられます。6どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち

明けなさい。7そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えをキリスト・イエスによって守るでしょう。8終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。9わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。

## 【福音書日課】マタイによる福音書 11章2~19節

2ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、3尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」4イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。5目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。6わたしにつまずかない人は幸いである。」7ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。8では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。9では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。」

10『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、

あなたの前に道を準備させよう』

と書いてあるのは、この人のことだ。11はっきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。12彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力ずくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている。13すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。14あなたがたが認めようすれば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリヤである。15耳のある者は聞きなさい。16今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。

17『笛を吹いたのに、

踊ってくれなかった。

葬式の歌をうたったのに、

悲しんでくれなかった。』

18ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、19人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 士師記13章2～14節

<sup>2</sup>ダンの氏族に属するツォルアの出身で、マノアという名の一人の男がいた。その妻は不妊の女で、子を産んだことがなかったが、<sup>3</sup>主の使いが女に現れて言った。「あなたは不妊の女で、子を産んだことがない。だが、身ごもって男の子を産むであろう。<sup>4</sup>今後はぶどう酒や麦の酒を飲まず、汚れたものを一切食べないよう気をつけなさい。<sup>5</sup>あなたは身ごもって男の子を産むからである。その子の頭にかみそりを当ててはならない。その子は胎内にいるときからナジル人として神に献げられているからである。この子は、イスラエルをペリシテ人の手から救い始めるだろう。」

<sup>6</sup>妻は夫のもとに来て言った。「神の人が私のもとにやって来ました。その姿は神の使いのようで、非常に恐ろしく、私はその方にどこから来たのかと尋ねることもできず、その方も私に名を明かしませんでした。<sup>7</sup>その方は言いました。『あなたは身ごもって男の子を産むであろう。今後は、ぶどう酒や麦の酒を飲まず、汚れたものを一切食べないよう気をつけなさい。その子は胎内にいるときから死ぬときまで、ナジル人として神に献げられているからである。』」<sup>8</sup>マノアは主に祈って、「わが主よ。どうぞ、あなたが遣わされた神の人をもう一度私たちのところに來させ、生まれてくる子に何をすべきか教えてください」と言った。

<sup>9</sup>神はマノアの声を聞かれた。神の使いが再び妻のもとにやって来た。彼女は野に座っていて、夫マノアがその場にいなかったのので、<sup>10</sup>妻は急いで走って行き、「この間私のところにお出でになった方が、また見えています」と夫に伝えた。<sup>11</sup>マノアは立ち上がって妻の後に付いて行き、その人のもとに来て、「妻と話したという方はあなたですか」と尋ねた。その人が「そうだ」と答えると、<sup>12</sup>マノアは言った。「あなたのお言葉どおりになりましたら、その子が守るべきことや、なすべきことは何でしょうか。」<sup>13</sup>主の使いはマノアに言った。「私がこの女に言ったすべてのことを、彼女は守らなければならない。<sup>14</sup>彼女はぶどう酒を作るぶどうの木からできるものは一切食べてはならず、ぶどう酒や麦の酒を飲んではならない。汚れたものも一切食べてはならない。私が彼女に命じたすべてのことを、彼女は守らなければならない。」

## フィリピの信徒への手紙4章4～9節

<sup>4</sup>主にあっていつも喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。<sup>5</sup>あなたがたの寛容な心をすべての人に知らせなさい。主は近いのです(別訳→近くにいられます)。<sup>6</sup>何事も、思い煩ってはなりません。どんな場合にも、感謝を込めて祈りと願いを献げ、求めているものを神に打ち明けなさい。<sup>7</sup>そうすれば、あらゆる人知を超えた

神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスにあって守るでしょう。

<sup>8</sup>なお、きょうだいたち、すべて真実なこと、すべて尊いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判のよいことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。<sup>9</sup>私から学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。

## マタイによる福音書11章2～19節

<sup>2</sup>さて、ヨハネは牢の中でキリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、<sup>3</sup>尋ねさせた。「来るべき方は、あなたですか。それとも、ほかの方を待つべきでしょうか。」<sup>4</sup>イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。<sup>5</sup>目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、規定の病を患っている人は清められ、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。<sup>6</sup>私につまずかない人は幸いである。」

<sup>7</sup>ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ出て行ったのか。風にそよぐ葦か。<sup>8</sup>では、何を見に行ったのか。柔らかい衣をまとった人か。柔らかい衣を着た人なら王宮にいる。<sup>9</sup>では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。

<sup>10</sup>『見よ、私はあなたより先に使者を遣わす。

彼はあなたの前に道を整える』

と書いてあるのは、この人のことだ。

<sup>11</sup>よく言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。<sup>12</sup>洗礼者ヨハネの時から今に至るまで、天の国は激しく攻められており、激しく攻める者がこれを奪い取っている。<sup>13</sup>すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。<sup>14</sup>あなたがたが進んで受け入れるなら、この人こそ。來たるべきエリヤなのである。<sup>15</sup>耳のある者は聞きなさい。

<sup>16</sup>今の時代は何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者たちにこう言っている子どもたちに似ている。

<sup>17</sup>『笛を吹いたのに、

踊ってくれなかった。

吊いの歌を歌ったのに、

悲しんでくれなかった。』

<sup>18</sup>ヨハネが来て、食べも飲みもしないと、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、<sup>19</sup>人の子が来て、食べたなり飲んだりすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きが証明する。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・12月15日「待降節第3主日」の日課主題は「先駆者」。この主日は、主イエスの先駆者と位置づけられる「洗礼者ヨハネ」が記念されてきた。また、古いラテン典礼入祭文の冒頭句「ガウデテ」から「喜びの主日」とも呼ばれてきた。

・旧約聖書日課は、「士師記」より、士師サムソン誕生譚の導入部。使徒書日課は、「フィリピの信徒への手紙」から、書簡終結部に置かれた最後の勧告の一部。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、獄中の洗礼者ヨハネのもとから遣わされた彼の弟子たちを前に主イエスがヨハネについて語られたことを告げる箇所。

**旧約日課(士師記 13章より)**

・「士師記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の第二巻として扱われる歴史物語文書。「前の預言者」第一巻の「ヨシュア記」が扱う「イスラエルのカナン入植時代」と、第三巻の「サムエル記」が扱う「王国時代の始まり」の狭間の時代を扱い、この時代を「士師の時代」と位置づけている。外形的には、この時代は、「サウルの王国」が成立する以前の諸部族が相当程度独立した集団として存在していた時代と位置づけられる。正典が一貫して前提としている「イスラエル十二部族」という枠組みは、実際にはいまだ自明のものとはなっていない時代で、後に「イスラエル十二部族」に数えられることにならない周辺部族も含めて、各部族が合従連衡を繰り返しながら、いずれ部族連合としての同盟関係を築いていくことになる上での相互の関係性を育んでいったと考えられる。この時代を経て、部族連合としての共通のアイデンティティを与える共通のルーツ(先祖や宗教)に関わる物語が成立したのであろう。その結果として成立したのが、「サウルの王国」であり、「ヤコブ=イスラエル」を共通の父祖とし、同時に「ヤコブの神」を共通の「主」とする部族連合王国が形成されていったと考えられる。しかし、そこに至るまでの経緯は一筋縄ではいかず、それぞれの部族に固有の歴史と「父祖物語」があったのであり、「士師記」は、そのような個別固有の歴史と物語の残渣を伝える文書となっているとみることもできる。

・「士師記」の主要部分は、12組の「士師」と呼ばれる人物の物語によって構成されている。「士師」は、外的などの危機に際して登場してくる救国の英雄として描かれるが、後の「イスラエル」の全部族を統括するような指導者ではなく、飽くまで一部の部族のみを統括する存在として描かれている。

・日課箇所は、「士師サムソンの物語」の冒頭部分で、サムソンの誕生譚となっている。誕生譚は、不妊の女が神意により身ごもって男の子を産むが、その子は将来の特別な使命を担わされている、という定型の展開を見せている。12の「士師」の物語のうち、このような誕生譚、あるいはこれに類する生誕にまつわる逸話

が含まれると言えるのは、他に「士師ギデオンの物語」(6~9章)、「士師エフタの物語」(11~12章)がある。誕生あるいは幼少期の生存において危機が訪れながらそれを乗り越えるという展開は、「英雄伝承」の定型パターンであり、オリエント世界の神話でも広く知られている。

・「士師サムソン」は、他の「士師」と比べて異色の人物として描かれている。彼は「ナジル人」という一種の誓願修道僧のような者となることを求められて誕生するが、その振る舞いは乱暴狼藉を厭わないならず者のように描かれる。にもかかわらず、彼は、当時「ペリシテ人」に支配されていた「イスラエル」の危機を救う役回りを引き受けることになり、最後は自身の命と引き換えにその役割を果たした、と物語られる。この役割を果たすうえで、サムソンは、いずれかの部族から招集された軍隊を率いる司令官としてではなく、ほぼ単独で行動する人物として描かれるが、これも他の「士師の物語」にはないことである。「士師記」は、このような人物を「ダン族」の者として登場させている(2節)。

・「ダン族」は、「士師記」の記述によれば、「イスラエル十二部族」の中で特異な集団であり、「サムソン物語」に続く17~18章には、ダン族移住の逸話が置かれている。移住したダン族が築いた聖所に仕えたのは、「モーセの孫でゲルシヨムの子であるヨナタンとその子孫」(18:30)であったとされているが、モーセの子孫に関する言及は、旧約正典で他にない。このダンの聖所は、「バビロン捕囚」まで存続したのみならず、「シロの神殿(聖所)」と並立していたものとされている(18:30~31)。旧約正典の「イスラエル正史物語」において、「シロの神殿」の機能は「エルサレム神殿」によって継承されたものとされている一方で、「ダンの聖所」は、ソロモン王没後の北王国イスラエルの国家聖所の一つとして「ベテルの聖所」と並んで「金の子牛像」が置かれたところとされている(王上12章)。

**使徒書日課(フィリピ 4章より)**

・「フィリピの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の6番目に置かれた書簡文書。パウロがバルナバ宣教団から離れて独自の宣教団を組織して展開したマケドニア伝道に際して創設した「フィリピの教会共同体」に宛てて記した書簡。この教会は、少数であったが、パウロの活動を積極的に支援し続けていたと考えられ、パウロとの個人的な関係性を抜きに本書簡を理解することはできない。

・日課箇所は、末尾の挨拶に入る前の最後に置かれた勧めの言葉の一部。文脈上、ここで「喜びなさい」と呼びかけられているのは、2~3節で名指しされている3人の人物、あるいは最後に挙げられている「真実の協力者」に向けてであるとも解せる。他方で、本書簡では繰り返し「喜び」を共有しようという勧告が繰り返されており(1:4,18,25; 2:2,17~18; 3:1; 4:1,4,13等)、「喜び」の勧告を特定の人物に限定しているというよりは、この三人における不足を補おうとしているのだろう。

## 福音書日課(マタイ 11 章より)

・日課箇所は、洗礼者ヨハネが投獄されていたときに彼の弟子が主イエスのもとを訪れ、問うたことに対して主イエスが応答されたという逸話で、「ルカ福音書」にも同じ記事が置かれている(ルカ 7:18~25)。この逸話を、「マタイ福音書」は、「十二人の弟子が宣教派遣されることを伝える逸話」(10 章~11:1)に続けて置いているが、「ルカ」は初期の活動を伝える別の文脈の中に置いている。他方で、「十二人の宣教派遣」を同様に伝える「マルコ福音書」および「ルカ福音書」でも、それに続いて「洗礼者ヨハネ」に関する別の逸話、すなわち「洗礼者ヨハネの処刑にまつわる逸話」を置いている。おそらく、「共観福音書」には共通して、主イエスによる「弟子たちの宣教派遣」を、「洗礼者ヨハネの宣教活動の終結」と結びつける意図があったのだろう。主イエスおよびその弟子集団は、事実として洗礼者ヨハネおよびその弟子集団と極めて近い関係にあり、「ヨハネ福音書」は主イエスの最初の弟子の数人はヨハネの弟子であったと明言している。そのような事実に対して、主イエスの弟子たちの教会は、主イエスと洗礼者ヨハネの関係性を明確にする必要に迫られていたのだろう。つまり、主イエスとその弟子たちの集団は、単に洗礼者ヨハネとその弟子たちの集団の残党に過ぎないのか、それとも、その両者の連続性にもかかわらず「洗礼者ヨハネ」とは明確に区切られた新しい事柄を担う集団として始まったものなのか、という問いに対して、主イエスの弟子たちの教会は、後者が答えであることを明示しようとしているのである。

・日課箇所の主イエスの発言において、「洗礼者ヨハネ」は最大限に評価されている。主イエスと彼の弟子たちの宣教活動の多くが、「洗礼者ヨハネ」の活動から受け継いだものであったことを、主イエスの発言として肯定するものとなっている。「マタイ福音書」は、冒頭から両者の「宣教の言葉」を一致させることによって(3:1~2 および 4:17)、両者の連続性を強調している。他方で、「マタイ」は、この主イエスの発言の中で、洗礼者ヨハネを「現れるはずのエリヤ」と明確に位置づけているが(17:9~13 も参照)、「ルカ福音書」はその理解を明示することを避けているように思われる。「現れるはずのエリヤ」は、「マラキ書」3:23 に基づく「主の日の訪れ」に先行して遣わされるエリヤ」という終末思想。「洗礼者ヨハネ」を「エリヤ」と位置づけるとき、後に続く主イエスは「主の日の訪れ」のしるしとなる。

## 来週の誕生日 (12 月 15 日~21 日)

## 主日礼拝の讃美歌から

・21-241「来たりたまえわれらの主よ」は、「Swiss Noel (Noël Suisse)」という曲名で 16 世紀以来、スイス・フランス国境地方で歌われてきた「ノエル」のひとつ。フランス語圏では、降誕節に演じられた降誕劇のためにさまざまな「ノエル」が歌われてきた。

・21-240「主イエスは近いと」(Ⅱ 48「主イエスは近いと」)は、古代ミラノ司教アンブロシウスの作詞とも言われるが、6 世紀の作詞者不詳の詞。19 世紀にモンクによって作曲された曲がつけられてから、英国教会系の讃美歌集で広く歌われるようになったアドヴェントの讃美歌。

・21-239「王なるキリストは」(= Ⅱ 38)は、原作者不明のギリシア語讃美歌をスコットランド長老派牧師ブラウンリーが英訳したとされる。曲は、アイルランドで出版されたプロテスタント讃美歌集(1749 年)でスコットランド民謡を元に作曲者不詳で公表されたもの。

## 21-241「来たりたまえわれらの主よ」

## O Dieu du clemens

- O Dieu de clémence, / Viens par ta présence, / Comblenous désirs, / Apaiser nos soupirs.  
Sauveur secourable, / Paradis à nos yeux, / A l'homme coupable / Viens ouvrir les cieux ; / Céleste victime, / Ferme-lui l'abîme.
- O bonté divine ! / Dieu vers nous s'incline ; / Du divin amour / Paraît enfin le jour. / Dans une humble étable  
Il va naître enfant, / Pauvre et misérable, / Dans le dénûment. / Heure d'espérance ! / C'est la délivrance !
- Un dur esclavage / Fut notre partage : / De tout l'univers / Il vient briser les fers.  
Loin de sa presence / Le péché s'enfuit, / Et par sa puissance / L'enfer est détruit ; / A tous sa naissance / Rendra l'innocence.
- Gloire au divin Maître / Qui bientôt va naître ! / Que nos chants joyeux / Eclatent jusqu'aux cieux !  
Que les chœurs des anges / Au divin séjour / Chantent les louanges / De ce Dieu d'amour ; / Et que par le monde / Toute voix réponde :

## 21-240「主イエスは近いと」

## Vox clara ecce intonat

- Vox clara ecce intonat, / obscura quaeque increpat: / procul fugentur somnia; / ab aethre Christus promicat.
- Mens iam resurgat torpida / quae sorde exstat saucia; / sidus refulget iam novum, / ut tollat omne noxium.
- E sursum Agnus mittitur / laxare gratis debitum; / omnes pro indulgentia / vocem demus cum lacrimis.
- Secundo ut cum fulserit / mundumque horror cinxerit, / non pro reatu puniat, / sed nos pius tunc protegat.
- Summo Parenti Gloria / Natoque sit victoria, / et Flamini laus debita / per saeculorum saecula. Amen.

## 21-239「王なるキリストは」

## The King Shall Come when Morning Dawns

- The King shall come when morning dawns / and light triumphant breaks; / when beauty gilds the eastern hills / and life to joy awakes.
- Not, as of old, a little child, / to bear, and fight, and die, / but crowned with glory like the sun / that lights the morning sky.
- The King shall come when morning dawns / and earth's dark night is past; / O haste the rising of that morn, / the day that e'er shall last;
- and let the endless bliss begin, / by weary saints foretold, / when right shall triumph over wrong, / and truth shall be extolled.
- The King shall come when morning dawns / and light and beauty brings: / Hail, Christ the Lord! Thy people pray, / come quickly, King of kings.